



像正面



像正面（拡大）



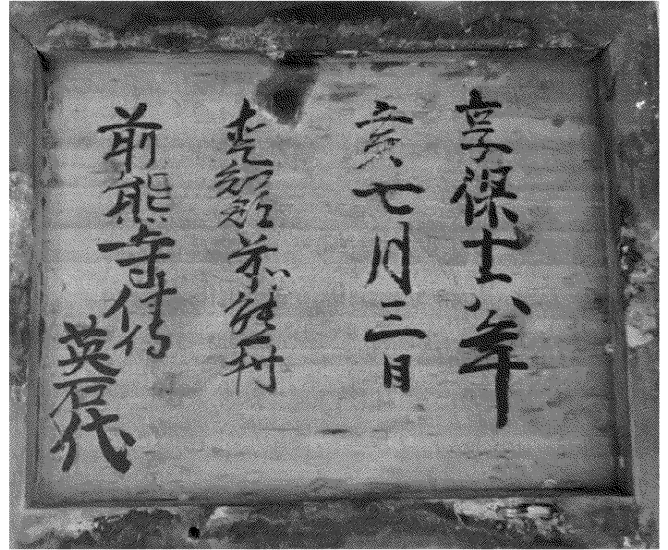
右側面



左側面



像背面



台座銘

第三章 美術・工芸

勸明王の奴僕となることによって、随順・息災の救いを得ることをあらわす。

豊龍院の二童子は立像で、大きさは、総高二六・五寸、肘張り一二・五寸、表面を古色で仕上げる。その像容は、明王右側に立つ矜羯羅童子は、表情隠やかに、頭を丸くし、簡略な胴着に胸充て様の前垂れを当て、左脇に独鈷を挾持して蓮華合掌する。左側の制吒迦童子は、弁髪に似た髪を両耳に束ね、条帛に短袴という出で立ちで、肩を怒からして、目を斜く。童子の左手は帛にかけ、右手には持物をもったようだが、今は伝わらない。痕跡から推せば金剛棒とも考えられる。

この二童子の制作年は、だいたい江戸初期にかかる頃までか。この造像年代は中尊の不動明王の制作年と多少異なるので、不動三尊像として同時に造顕されたとは思われないが、町内において不動三尊が揃うのは、豊龍院のこの一例だけ、ということを考えれば、貴重な遺例といえよう。

その他の明王例は町内には少ないが、永見寺で木造烏枢沙摩明王立像一軀をみることができる。

烏枢沙摩明王 梵名 Uchusma の音からきたもので、烏羽瑟摩、烏枢沙摩とも記され、穢積金剛、受触金剛、不浄潔金剛、不壊金剛などとも訳される。世の中のすべてのものに接して、一切のけがれや悪を焼尽する偉力を示す明王として説かれ、単独に信仰されることが多い。

永見寺の烏枢沙摩明王は、小さな厨子におさめられた小像で、台座底から火炎付輪光頂までが三一・五寸、一面四臂、忿怒の青面像である。四臂は中央二手が智吉祥印、右手に三叉戟、左手に素をもつ。頭に宝冠、胸に胸飾りと瓔珞、手足に環釧をつけ、条帛と虎皮褌をまとう。火炎光を背負い、右足を体前に折り曲げ、岩座に一本足立ちする姿は、小さいながら堂々としている。本像の造像年代について記すものはないが、新しい火炎光背以外は、江戸時代のものであろう。

四 天部の像

密教では天と名付けられた仏が著しく多い。これらは仏教成立以前からインドににあったバラモン教・ヒンズー教の神々が、様々な場合の護法神として、もとの名称のまま仏教に組み込まれたといっている。これらは方位を守護する十二天や、星宿関係の天などいろいろあるが、本来、天界に住むので天と呼ぶのであり、仏像としてよりもむしろ、神像に含めるべきかもしれない。

天部の諸像は多種多様であり、四天王や梵天・帝釈天、前出、薬師如来の項で詳述した十二神将などの神王形の天は甲冑をつけ、自然が神格化された弁才天・日天・月天などは天女形で、天衣をまとうのが普通である。一般に、男性の天は甲冑を着し、その下に上衣・股下衣・裳をつけ、沓を履いて足元に邪鬼を踏む姿が多い。女性の天はひれ袖のついた長い袂の上衣をまとい、下に下着と裳をつけて沓を履く姿が多い。

もともと異教神であった諸天も、やがては仏教守護神の性格から、現世利益をもたらす神としての性格を強めるに至り、広く一般に信仰されるようになった。

町内にも諸天信仰は行われるが、講を成すような顕著な例はない。したがって、天の像例も少なく、薬師如来の眷属十二神将像の二組二四軀を除けば、韋駄天像と恵比須天・大黒天像をみるのみである。

韋駄天 梵名の Skanda から塞建陀、建陀とも呼ばれる。四天王の一の増長天の従者八將軍の一人で、寺の伽藍の守護を本誓とする。一説にヒンズー教湿婆神の子と伝えられ、天軍の将にして走力にすぐれ、速かに邪神を消除するので、釈迦涅槃の折招かれ遺法護持に当たったという。今日では禪宗寺院の厨所に、その姿をみる人が多い。

町内の韋駄天像は四軀で、前熊地区の三禪寺、つまり前熊寺、昌隆寺、観山寺と、岩作の安昌寺にそれぞれ保有される。像はいずれも木造の小立像で、一面二臂、甲冑姿をして合掌し、火炎付輪光を背にして岩座に立つ。観山寺の韋駄天像は、総高わずか二一・五寸の小像であるが、甲に飾りをつけたり、木彫の表面を美しく彩色したり、天將の華やかさを備える。また、前熊寺のそれは円空彫りになるもので、総高一六・〇寸、一木に鈍の跡も荒々しい素彫りで、表面に古色をつける。像の着衣や甲冑は、円空独自の方法で簡略化され、沈静した気分を醸し出す。本像は享保一六年（一七三二）、英石代に当寺に新添された。

五 羅漢及び高僧部の像

羅漢 梵名 Alhau の書写で、阿羅漢の略、尊敬をうける人の意である。すなわち、仏道を修行して迷いの世界を脱し、煩悩を断ち切り、阿羅漢果を得た高僧をいう。

この項では、羅漢をはじめ、仏弟、仏教各宗の祖師、高僧などを含み、町内でみられる像を中心に、簡単に述べる。

羅漢部の像で最も一般化しているのは、十六羅漢像であろう。十六羅漢は釈迦如来の眷属としても説かれるが、本来は正法護持のために講ぜられた修行者の一群であるので、禪宗系諸派では修行の階程として尊崇する。したがって、画像や彫像も比較的多くみることができる。

町内では、安昌寺はじめ数か寺で、軸装された十六羅漢図がみられるが、彫像は少なく、前熊寺の須弥壇の両脇の、羅漢十六軀だけである。この一六軀は、大正八年同寺に新添された。それぞれの総高は六〇・〇寸、木造彩色像である。

羅漢には、ほかに五百羅漢が一般に知られるが、町内に造像例はみない。

釈迦の高弟一〇人を集めて十大弟子という。頭陀第一の大迦葉、天眼第一の阿那律、説法第一の富楼那、論議第一の迦旃延、持律第一の優婆塞、戒行第一の羅睺羅、智慧第一の舍利弗、神通第一の目犍連、多聞第一の阿難陀、解空第一の須菩提である。普通、これらの像を釈迦の左右に配する例をみるが、町内では一〇軀が揃う例はなく、大迦



九六 韋駄天立像

木造 古色 一軀

全高 一六・〇センチ

円空作

前熊寺蔵

記銘（箱裏墨書）

享保十六年亥七月三日

愛知郡前熊村

前熊寺住持 英石代

一 愛知県の円空仏

円空は寛永九年（一六三二）美濃國に生まれ、寛文三年（一六六三）に初めて造像、元禄八年（一六九五）に入寂、するまでの三十余年間全国を巡錫し、各地に五三五〇余体の円空仏を彫り遺している。

円空が愛知県を巡錫したのは、寛文七年（一六六七）、寛文九年（一六六九）、延宝四年（一六七六）、貞享元年（一六八四）、元禄四年（一六九二）の五回が資料から実証される。きわめて行動的な円空が、それ以外に何度も愛知県内に巡錫の歩を向けたであろうことも想像に難くない。

愛知県内にはおよそ三二〇〇体の円空仏が確認され、これは円空仏全体の六割弱にあたり、全国一の像数を誇る。数の多さのみならず、円空仏の彫削を高らしているいわゆる「円空様式」確立への出発をしたのが名古屋市中種区・鈍薬師の諸像であり、開花をしたのが名古屋市中川区・荒子観音寺の群像といえ、円空研究にとって愛知県はきわめて重要な地域である。

鈍薬師と荒子観音寺の円空仏

名古屋市中種区・薬師堂（通称・鈍薬師）に祀られている十七体の像は、『張氏家譜』の「寛文九四年…右薬師堂新田所江引移小堂建立仕新仏等をも安置仕候右の通り…」の記載および『那古野府城志』の「寛文九四年…小字を造日光月光阿菩薩十二神の像を新彫して安置せり此仏像は新木のままにて鈍作り也と云…」の記載により、寛文九年（一六六九）に造像されたものと考えられる。

鈍薬師は明の帰化人、張振甫の発願によって建てられた堂である。円空がいかなる理由で、尾張二代藩主の徳川光友から藩医を懇望されるほどの張振甫と知遇を得て、鈍薬師の諸像を造像することになったのか明確ではない。しかし、願主たる張振甫の意向や教長が反映されているのであろうか、鈍薬師諸像には

胸の所に日光菩薩は日輪を、月光菩薩は三日月の月輪を象徴的に持たせている。日輪、月輪の周囲身体部いっばいに渦巻唐草紋様が彫り巡らされている。円空は生涯にわたってこの紋様を像種に関係なく彫っているが、当所像が嚆矢である。阿像ともに蓮座上に立つが、その下に日光菩薩は四角形、月光菩薩は円形の薄い板状の台座が彫られており、このような台座は阿像のみである。

阿弥陀如来と日光菩薩の後頭部におの（七・五×三・三cm）（六・二×三・五cm）の埋木があり、円空は像内に何かを納入している。円空像中に埋木のある像は十三例あり、時期は寛文九年～延宝二年（一六六九～七四）の五年間ほどに限られており、当所は像内納入例の最初である。十三例中、五例の埋木が外され、梵字の書かれた紙に仏舍利に見立てた石が包まれているのが共通した納入品であるが、当所の二体の埋木は固く閉ざされたままである。

左右脇壇に、十二神将像と僧形合掌像が祀られている。十二神将像個々の様式上の特徴を見ると、おのおの個性を持たせた造形がなされていることに加えて、対称的に彫られた像による構成であることが指摘できる。

子像（一二・三・二cm）と午像（一二・二・〇cm）阿像は、非人間的な形態と表情をしている当堂の十二神将の中で、人間らしい表情をした人体様の像容である。ともに下部いっばいに彫られた銭の柄を両手で持つており、子像が銭の刃を向かって右に向けているのに対して、午像は左に向けている点だけが異なっている。

丑像（一一・〇・〇cm）と亥像（一二・〇・〇cm）は、一本に刻された肩と突出した眼の同じ表情であり、長方形を斜めに切った左の面が丑像、右面に亥像がほぼ同形態で彫られている。側面のクローバの葉のような紋様も同じである。

寅像（一二・四・〇cm）と戌像（一二・四・〇cm）はともに鑢を持つている点が共通している。

卯像（一一・〇・〇cm）と酉像（一二・七・〇cm）は、形態的にはあまり似ていないが、阿像とともに左手に宝棒を持つている。

中国風の装飾や雰囲気が見受けられる。

鈍薬師の本尊は、鎌倉期作とされる半丈六の薬師如来であるが、円空の阿弥陀如来（一六四・五cm）、観音菩薩（一六三・五cm）の二像が本尊の左右に脇侍の如く置かれている。阿弥陀如来、観音菩薩を薬師如来の脇侍にする三尊形式は一般的には聞かない。しかしながら円空像中には、岐阜県高山市丹生川町・薬師堂に薬師如来を本尊として阿弥陀如来、観音菩薩を脇侍とした三尊形式の円空像が祀られている。また、岐阜市・個人宅にも同様の三尊が安置されている。これらの例から、当所の阿弥陀如来、観音菩薩は、本尊薬師如来の阿脇侍として造像されたものと考えられる。

阿弥陀如来は、肉髻、通肩で上品上生の阿弥陀定印を結ぶ。観音菩薩は、三段の髪を長く肩に垂らし、通肩で、法界定印の上に蓮華を持つ。阿像とも、二本の線で真ん中に肉部をのこした細い目、三角錐を低くしたような鼻、かすかに笑みをみせる口もとの静謐な表情をしている。ともに蓮座、反花が彫られているが、円空像中で反花が彫られているのはこの二像のみである。阿像は、形態および計測値から一本の丸木を上、下二本に切り、上部を観音菩薩、下部に阿弥陀如来が彫られていると思われる。

阿弥陀、観音の内側左右に日光（二四・五・五cm）、月光（二四・九・五cm）阿菩薩が祀られている。阿尊は本来薬師如来の脇侍として祀られる像である。ところが阿像は、半丈六の本尊薬師の脇侍とするには像高がやや低い。先述の阿弥陀如来、観音菩薩が三尊としてふさわしいと考えられるが、日光、月光も普通の三尊形式を踏まえて造像されたのだろうか。あるいは、この二尊の本来の主尊である円空の薬師如来があつたかもしれない。その一例として、名古屋市中種区・善昌寺の薬師如来が挙げられる。日光、月光阿像とも表面が滑らかにされているのは、阿弥陀、観音と同じであるが、眼が一本の刻線であらわされているのが違う。阿像とも目尻を上にあげ、口もとには微笑みが見られる。日光菩薩の頭部は火輪状であるのに対し、月光菩薩は冠状にして表現を委ねている。

辰像（一二・九・〇cm）は十二神将中、最も特異でかつ個性あふれた像である。

髪を直立させ、まん丸の目玉を突出させ、口は大きく裂けた動物様の表情であり、あるいは龍を象徴させているのかもしれない。その龍そのものの顔が、身体上部は半分にわたって彫られており、角が大きくひげも長い。龍の身体部分とところどころみられ、辰像全身を巻いている。龍の周囲いっばいに渦巻唐草紋様が彫られ、龍が天に昇る構図である。申像（一二・七・〇cm）の逆立った髪、裂けて両端を極端に上げた口等の表情は辰像ときわめてよく似ている。ともに人間離れした表情をしており、阿像は共通性がある。

巳像（一二・四・〇cm）は右手に、未像（一二・六・〇cm）は左手に弓を持つている。

以上あげてきたように、円空はあきらかに意識して二体ずつを対として造像している。子像と午像、丑像と亥像、寅像と戌像、卯像と酉像、辰像と申像、巳像と未像の組み合わせは、北斗七星の本命星に一致する。天台密教には、陰陽道の影響をうけ、「北斗七星は人の一生を司り、七星のうちのひとつが本命星として選ばれる」（天台密教の本）学習研究社、一九九八年」という信仰がある。北斗七星のおおの星、貪狼星・破軍星は子と午、巨門星は丑と亥、祿存星は寅と戌、文曲星は卯と酉、廉貞星は辰と申、武曲星は巳と未年生まれの人の人生を司るというものである。

円空が対にした二体は、北斗七星信仰による運命共同体の生まれ年の干支と一致する。円空は当時民間で盛んに行われていた北斗七星信仰を造像に際してとり入れたと思われる。

また、対になっている一方は、子から始まる十二支の前半六体であり、それらが後半六体の像に対応している。ただ、対応する像は左右に六体ずつ順番に並べても、対になる像がお互いの正面にはこない。ところが子から巳までの六体を順番に並べ、反体側に逆方向から午像一体をずらして亥像までを順に配置すると、子と午像がおのおのの配列の最初像として相対し、他の五組の対は

ちようにお互いの正面にくる。

僧形合掌像（八三・〇cm）は、前屈みの姿勢をして胸前で合掌した両手の先端に何かを持っている。渦巻唐草紋様が全体に彫込まれた衣服を付けている。本像の尊名については、救脱菩薩、善財童子、張振甫等の諸説が出されているが、私は聖徳太子二歳の南無太子像であると思っている。両手で持っているものは「聖徳太子が二歳の時、東を向いて合掌して南無仏と唱えた際、手から舍利が出た」という逸話がある仏舍利ではないかと思われる。当堂の本尊が聖徳太子作の伝承をもち、本像が童子を思わせる顔立ちであること等が本像を南無太子像と推定した理由である。

円空は当所で初めて群像を手掛けたのであるが、みてきたようにあらかじめ円空が考えた全体の構成の中で各像を造像していったことが想定される。後年、円空は各地に多くの群像を遺すようになるが、十二神将のようなセットの群像は無論のこと、一見無関係のような群像も、最初からそうであったように全体の構成に沿って造像したと考えられる。そしてそれは単に像の様式上の構成のみならず、像種の構成においても、円空の考えた信仰の統一された世界の中に成り立っているのではないかと思われる。

鈍葉師の円空仏は、それ以前に彫られたどちらかといえば伝統的仏像の形態が意識された像と違い、また後年の抽象的造形と面の構築で成り立ち、独特の微笑をたたえた「円空様式」の諸像とも異なった像群である。それは、円空が自己の様式確立へ向けて、最初の試みをしたことを物語っている。また、円空が鈍葉師像以前に彫ったのは、大部分が単独像であり、かつ如来と菩薩部に限られていたのが、鈍葉師で初めて群像を手がけ、同時に初めて天部の像を彫ったことが指摘される。

円空は鈍葉師諸像の造像によって多くの種類の、また多くの形態の像を彫り得る自信を持ったことであろう。以後、円空の彫像はいくつかの変容を見せながら、自己の造形確立への歩みを続けていく。そして延宝三年（一六七四）に

円空像中、最もにこやかな表情をしている。大目で胸腹の胸飾りを付け、左の一手にシヨケラを持つ青面金剛神（図10）の岩座には、三猿と鶏が彫られている。烏帽子をかぶり、頸ひげを垂らして横坐りをしている柿本人麿（三六・八cm、口絵39）は、背面に「荒子寺 キシン圓空」の刻書がある。

天台宗十八世座主、慈恵大師が三体（図11）も彫られているのは、円空の崇敬が篤かったのだろう。僧形像（図12）の身体下部に真横に鋸の切り込みがそのまま残されているのは、いかにも円空らしい。荒子観音寺には如来像が少なく、強い彫りとにこやかな表情の薬師如来（図13）が一体ある。牛頭天王（図14）は津島神社との関連が考えられる。背銘に「金剛童子」（図15）の墨書がある像は顔面だけ彫られ、大層抽象的である。

雌雄二体の象が抱擁している歓喜天（図16）は、円空仏が多数蔵されている荒子観音寺、飛騨・千光寺、美濃・高賀神社の三か所に遺されているだけである。宇賀神（図17）は、人頭蛇身で穀物の神とされ、民間信仰の中から生まれた神である。五輪塔（図18）は、岐阜県羽島市・中観音堂蔵と当所の二基しかない、背面に舍利を入れる穴が開けられている。円頂、上半身裸形で合掌する像容の南無太子（図19）は本像のみであり、小像であるが貴重である。台座に獅子が彫られた文殊菩薩もある。十五童子（図20）は、北海道登別市・聖光院へ遷座した宇賀弁才天の眷属である。不動明王の小像は、十五童子と同じ台座に置かれており、一体のものと考えられる。

荒子観音寺の円空仏の中で、特に光彩を放っているのが三体の護法神である。背面に「乙九乙護法」の刻書をもつ立像（六一・〇cm、口絵39）は、きわめて強い面の構成で造られている。「円空様式」の一つの特質は「抽象性」と「面の構成」の造形とも言えようが、本像は特に面の構成で成りたっている。名古屋市南区・神明社の善女龍王立像（作品258）と対で造像されている護法神立像（二二七・〇cm、口絵39）は、顔面部、宝珠および側面左右と下部に最少の刃跡だけを残した大層抽象化された像である。単純でそれでいて力強い造形は円空

至って、いわゆる「円空様式」で何体かの像を志摩地方に遺すことになる。それから二年後、円空の造像は荒子観音寺において一気に開花し、きわめて多数の像が彫られることになる。

名古屋市中川区・観音寺（通称「荒子観音寺」）には一二五五体の円空仏が現存する。数の多さだけではなく、三〇〇cmを超える仁王阿像からわずかに八cmの阿弥陀如来像に至るまで、多形態でかつ像種も多い。

荒子観音寺蔵の『浄海雜記 三』に「阿頭愛染法一冊 奥書云 延寶四丙辰年極月廿五日 日本修行乞食沙門 圓空（花押）」とある。『阿頭愛染法』は現在、所在不明であるが、この記述により円空が延宝四年に荒子観音寺に留錫していたことがわかる。そして志摩半島に遺る延宝二年の像からの様式上の連なりを考えれば、荒子観音寺の円空仏のほとんどは延宝四年に造像されたことが推定される。

荒子観音寺の円空仏は、仁王像二体（阿形・図1、吽形・図2）が仁王門に、釈迦如来（図3）と大黒天（図4）の大きな二像が本堂に安置されている以外、かつて境内各堂に祀られていた諸像すべてが客殿に集められている。

右手の親指と人差指で円を作り左手に蓮を持つ二二九・九cmの観音菩薩（口絵39）は、仁王像を除けば荒子観音寺の円空仏中最大であり、中心的役割としての造像と思われる。前頭部に動物の顔が彫られ、右手に水瓶、左手に宝珠形の龍を持たせた菩薩像（図5）は、尊名をつけるのに困る像である。

制吒迦、鈴羯羅童子を伴った不動明王（不動明王九五・〇cm、制吒迦童子五四・九cm、鈴羯羅童子五四・五cm、口絵39）はきわめて力強い迫力で圧倒される。愛染明王坐像（図6）は、頭上に獅子冠、三眼が彫られ、宝瓶に坐す。左右二臂ずつ四臂が失われており、その部分に穴が開いている。

雨宝童子立像（図7）は、頭上に塔を載せ、左手に宝珠、右手に宝棒を持ち岩座に立つ。秋葉神（図8）は、冠様の頭部で嘴を尖らせた抽象的な形態をしており、身体部左右の突起は羽のように見える。袋を背負った布袋（図9）は、

の代表作の一つに数えられる。数少ない大きな怒髪の前頭身ながら全体の形態は見事な調和を保つもう二体の護法神（作品240）は、抽象性と面の構成を兼ね備えた迫力ある像である。

通称「本端仏」と称される像（二七三・七五・二cm、口絵39、作品241）三十一体および一〇二四体の千面菩薩（二・八・四六・四cm、口絵39、作品242）は、作品解説でも述べたように円空仏の特質を最もよく示している像である。

「本端仏」は大半が観音三十三応化身であるが、背面に「長者身」の墨書がある像（図21）の後頭部に、梵字「ム」（イ・文首記号）が書かれている。また、千面菩薩中の阿弥陀如来（作品242—図2）と薬師如来（作品242—図4）の後頭部にも「ム」がある。千面菩薩の中の一番大きい像（作品242—図3）の背面には「金剛界五仏種子」（ム（バン・大日如来）、ボ（タラク・宝生如来）、ヒ（キリック・阿弥陀如来）、フ（アク・不空成就如来）、ウ（ウーン・阿閼如来））の墨書がある。従来千体仏と呼ばれていた厨子に入りきれなかったと思われる千面菩薩の一体（図22）の背面にも「金剛界五仏種子」がある。この像には、観音三十三応化身が説かれる『法華経 普門品二五』の一部が書かれており、千面菩薩が観音三十三応化身を拡大して千応化身として造像されたことを証している。

「ム」と「金剛界五仏種子」の組み合わせの梵字が書かれるのは、寛文九年（延宝七年（一六六九）七九）には限定されている。様式上に加えて荒子観音寺諸像の大半が延宝四年の作であることは背面梵字からからも想定できる。

『浄海雜記 三』に「請造二大力士像上人乃以一鈍刻之不日而成后又以其余材刻佛像神軀大小数千体」とある。円空はヒノキの太木から最初に三〇〇cm余の仁王像を彫り、その余材でかなりの大きさを持つ諸像を刻し、そして平らな材では本端仏を、更に小さくなった木で千面菩薩を造像したと思われる。

荒子観音寺には、他に山王神坐像四体（図23）が安置されているが、実はこ

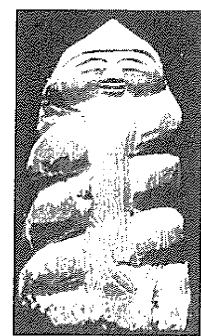


図 17 19.5cm

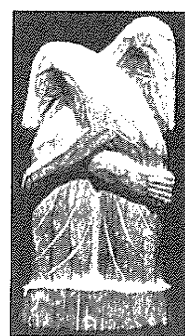


図 16 12.5cm



図 15 33.0cm



図 14 41.2cm

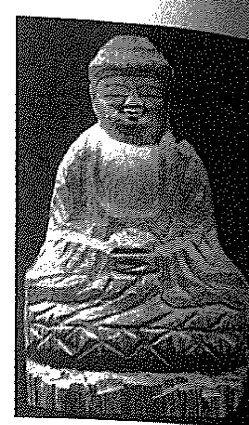


図 13 45.5cm

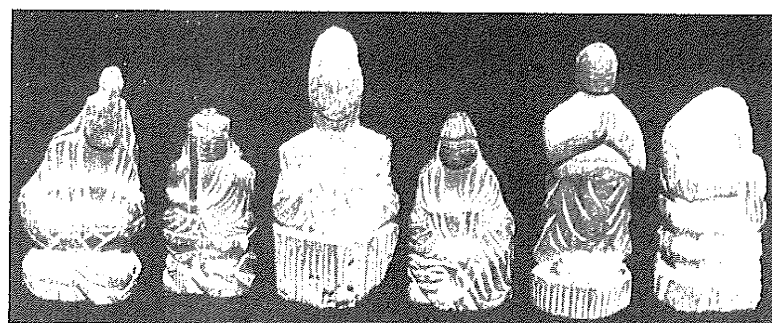


図 19 文殊菩薩 9.7cm 不動明王 7.8cm 不詳 11.0cm 文殊菩薩 7.8cm 南無太子 10.5cm 宇賀神 8.7cm



図 18 4.6cm



図 20 6.0 ~ 7.5cm

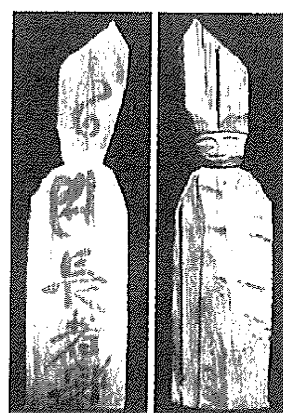


図 21 56.5cm



図 24 100.5cm

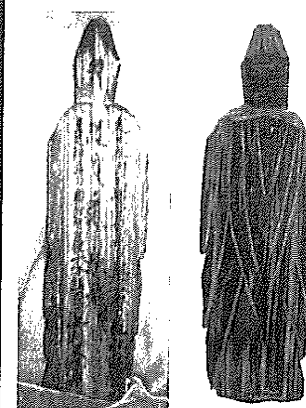


図 22 20.5cm

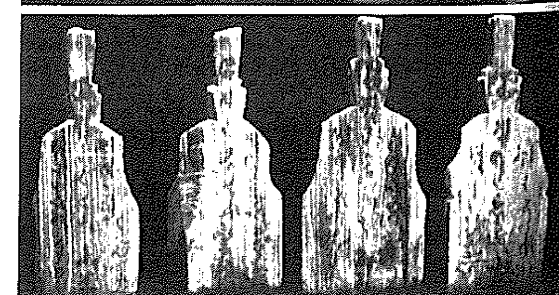


図 23 22.6cm 22.1cm 21.5cm 21.4cm



図 2 305.7 × 84.0 × 75.5cm



図 1 321.3 × 95.8 × 69.5cm

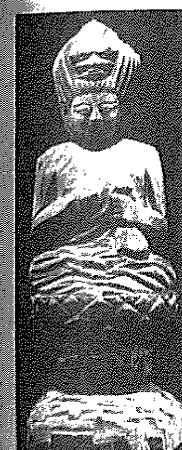


図 6 56.5cm



図 5 91.3cm

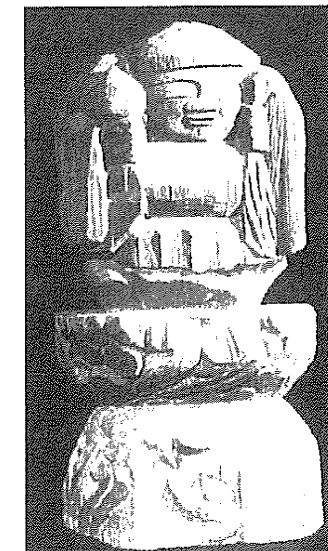


図 4 104.3cm

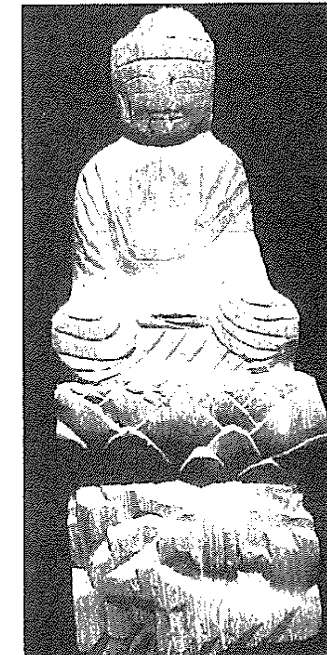


図 3 125.4cm



図 9 44.0cm

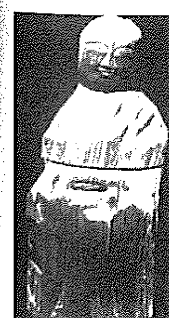


図 12 42.6cm



図 10 30.7cm

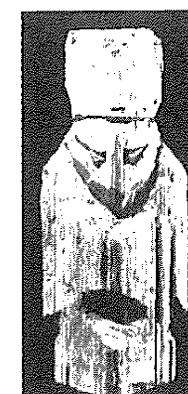


図 8 47.9cm

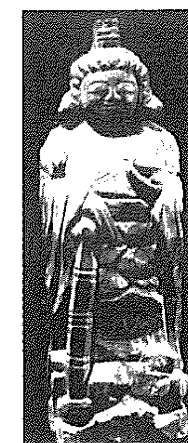


図 7 51.5cm

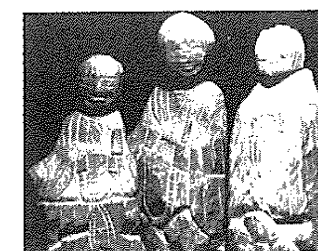


図 11 28.2cm 34.1cm 31.4cm

の四体のみは造像時期が他の諸像と違つて、貞享か元禄年間作ではないかと思われる。この山王神四体の背面後頭部には、「最勝の」という意味をあらわす梵字(ウ)が書かれ、下方には「大日如来三種真言」の(ア)イ(イ)イ(イ)イ(ア)ラハシヤナウ(ア)バンランカンケン(ア)ビラウンケン、(ア)ラハシヤナウの墨書が見られる(なお、円空が書く(ア)イ(イ)イ(イ)イ(ア)ラハシヤナウは、(ア)ハ(ハ)が(ア)ハ(ハ)ナウ(ナウ)は(キヤ)となっている)。⑤と「大日如来三種真言」の梵字の組み合わせは、本像が天和以後(一六八一)の後期作であることを示している。

⑥は梵字の正式な字形に当てはまらないが、読み方、意味は谷口順三氏の



図25 35.0cm



図26 39.5cm

説による。また、梵字による造像年推定は拙論による。荒子観音寺で山王神四体のみにこの梵字が書かれていることは、山王神が後年の造像であることを示すと同時に、それ以外の諸像が延宝四年作という推定の傍証ともなる。

荒子観音寺には以上の諸像のほか、藤原期の菩薩立像に、円空が補修を加えている例もある。古仏らしく修復せずに、円空特有の顔と手がそのまま彫り付けられている(図24)。円空が古仏を修復した例は、本像を含め三例ある(尾張旭市・山中観音堂聖観音菩薩(作品67)、奈良個人蔵地藏菩薩二・六cm)が、いずれも円空とすくわかる修復の仕方である。

書に、本像は明治六年九月に「村上良音」より寄付されたと記されており、当寺において造像されたものではない。しかし尾張地区に点在する寛文期を示す諸像を合わせて考えれば、本像が尾張で造像され、当時円空が尾張地方を巡錫していたことは十分考えられることである。

名古屋市中山区・龍泉寺に安置される馬頭観音菩薩像背面に「延寶四丙辰立春大祥吉」の墨書があり、荒子観音寺諸像とはほぼ同時期の作であることがわかる。龍泉寺には、この馬頭観音菩薩像の両脇侍と思われる熱田大明神・天照皇太神像も祀られている。この三尊形式は円空独自のものであろうが、珍しい組み合わせである(作品248)。龍泉寺にはこの三体のほか、千体仏五三五体(図27・一部)も現存している。この千体仏は、荒子観音寺の項で述べた千応化身の千面菩薩であろうと思われる。

馬頭観音菩薩像の背銘に、造像年とともに「日本修行乞食沙門」の墨書がある。同じ自称が荒子観音寺の「阿彌愛染法」奥書中にも書かれている。「日本修行」で、それまでの遠く北海道への巡錫から厳しい大峯山修行等々に対する円空の自負がうかがわれ、「乞食沙門」によって、宗教家としての円空の誇りが感じられる。経済的基盤を持たず、悟道と布教を旨とする宗教家が、日々の糧を得るために「乞食(こつじき)」をすることは、仏教成立当初からとるべき本来の姿と思われる。円空が自身を「乞食沙門」と名乗ることは、荒子観音寺の千面菩薩厨子に書かれた「観喜沙門」の自称とも合わせて、この頃の円空の「悟達の心境」を端的にあらわしているように思える。一般的に、作品への評価とその作者の内実とは、一致し難いといわれる。しかしながら、円空仏の様式変遷と円空の信仰深化の過程は密接に結びついている。

愛知県内の円空仏の最も大きな特質は、延宝四年の荒子観音寺諸像を中心とする展開である。しかし県内への円空の巡錫は、延宝四年(一六七六)以外にも先述した寛文七年(一六六七)、寛文九年(一六六九)に加えて、貞享元年(一六八四)、『元禄四年(一六九一)』が実証される。そして県内各地には円

その他、かつて同寺境内で、現在隣接の神明社内には円空の鹿嶋大明神(作品251)が祀られているし、名古屋市中区・光賢寺の本尊である観音菩薩(図25)、同熱田区・光耀寺に安置される釈迦誕生仏(図26)は、荒子観音寺から遷座されたことが『浄海雜記二』に載っている。同南区豊田・神明社の善女龍王立像(作品258)が荒子観音寺から勧請されたことは作品解説で述べた通りである。同町の個人蔵の如来坐像も同じ時の移座と考えられる。北海道登別市・聖光院の弁才天、長野県飯田市・運松寺(作品303)と願王寺(作品304)および名古屋市中村区・個人の千面菩薩は、同寺から移されたものであり、千葉県山武郡・観音教寺の本端仏(作品306)は、荒子観音寺の本端仏群像の一体であつたと思われる。その他にも由緒、経歴は明確ではないが、荒子観音寺からの遷座ではないかと思われる像が何体もある。以上のように愛知県の円空仏を考えるうえで、荒子観音寺の占める位置はきわめて高い。

『浄海雜記一』に「諸國を巡歴して佛像十二万體を刻せり(原本は漢文)」という記載がある。『尾張名所図会』の「浄海山観音寺円龍院」の項に、「円空師は仏像十二万體を刻まんと誓願あり」という記述が見られる。世に言う円空十二万體造像説は、この二書が源である。実際に十二万體を彫ったかどうかは別にして、十二万體造像の願は荒子観音寺で形成されたことも想定される。荒子観音寺の円空仏について述べられた二書にその記述があること、およびただしい数の円空像が荒子観音寺に遺されていることが、この想定に厚みを加える。

円空の造像は、荒子観音寺への過程であり、荒子観音寺からの出発であるといつても過言ではない。

尾張の円空仏

愛知県内の円空仏で年代的に最も早い像は、大治町・寶昌寺に安置されている寛文七年(一六六七)作の観音菩薩像(作品29)である。寶昌寺に残る古文

空の幾度にも及ぶ巡錫を証明する各時期の様式を示す多くの像が存在する。それぞれの像はおのおの個性を有し、それらの像が各地域の特性を作っている。作品解説では、各地の代表的な像を選んで構成した。しかしながら、紙幅の都合でそこに載せることが出来なかつた優れた像も多く、次に列挙しておく。

名古屋博物館所蔵の十一面観音菩薩立像(図28)は、かつて名古屋市中区・個人所有の山中の小祀堂に安置されていた像である。名古屋市中区・個人蔵の坐像(図29)は、火焰状の頭部をしている観音菩薩の像容であるが、背面には阿彌陀三尊の種子「唵(キリク・阿彌陀如来)唵(サ・観音菩薩)唵(サク・勢至菩薩)」が書かれ、さらに底面には梅の花が描かれており、尊名を確定し難い。同個人蔵の観音菩薩像(一一・九cm)は裳懸坐の下で、上下に分けられ、竹釘で止められており、一木が大半を占める円空仏の中で珍しい。

犬山市・円明寺の如来像(図30)は、本尊須弥壇の下からの発見であり、優しい温顔を見せている。

小牧市・個人蔵の観音菩薩像(図31)は本体と台座が分かれており、竹釘で止められている。このように分割される像は、先述の荒子観音寺の千面菩薩中の観音菩薩像、名古屋市中区・個人蔵観音菩薩像と岐阜県岐阜市・大智寺の観音菩薩像(二三・五cm)の四体がある。

一宮市・個人蔵の大黒天像(図32)は像高一三三・〇cmで、二十三体確認される円空の大黒天像の中で一番大きく、かつて名古屋市中八事山中の小祀堂に祀られていた。同・宝光寺の弁才天像(図33)は、小像ながら八臂が造られ、宝珠、輪、劍等の持物も彫られている。頭上に鳥居がある弁才天は本像のみである。同・某寺の十一面観音菩薩坐像(図34)と薬師如来坐像(二〇・一cm)は近年(平成二十二年)の発見である。同・某所の観音菩薩像は後人によって全身に漆が塗られている。

扶桑町・福塚集会所の観音菩薩像(図35)は、裳を蓮座の両側に垂らした像容で半跏倚像のように見える。

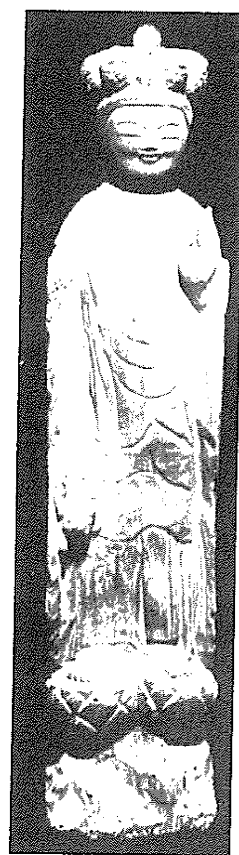


図44 72.0cm

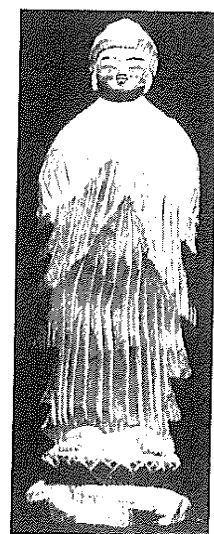


図42 29.0cm



図41 24.4cm



図40 24.5cm



図39 32.4cm



図45 7.7cm

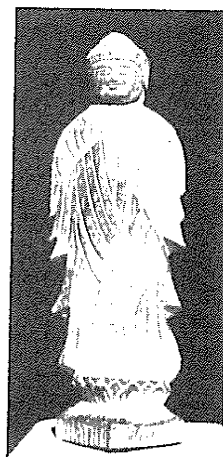


図43 21.0cm

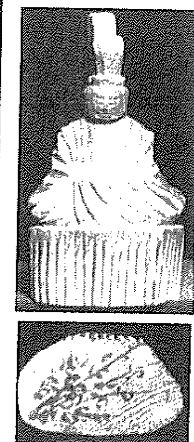


図48 9.1cm



図51 16.2cm



図50 42.0cm

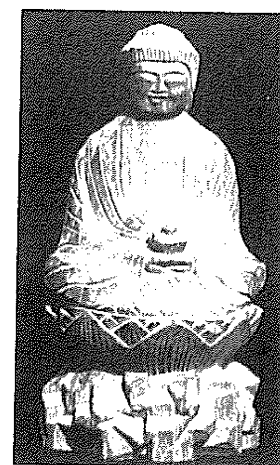


図49 32.0cm



図47 46.0cm

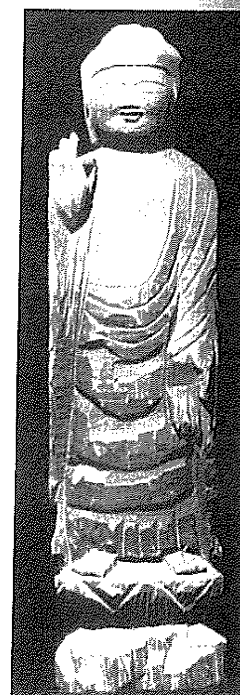


図46 66.0cm

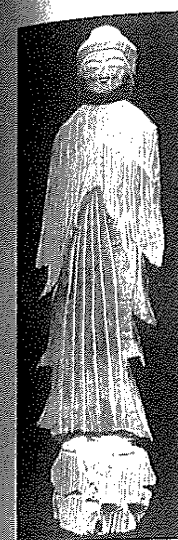


図30 50.5cm

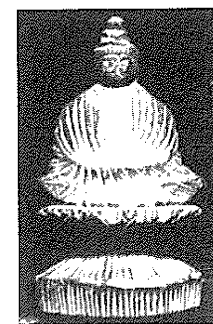


図29 14.2cm

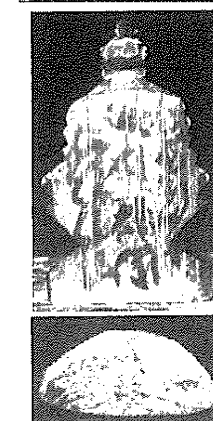


図28 135.0cm



図31 20.8cm

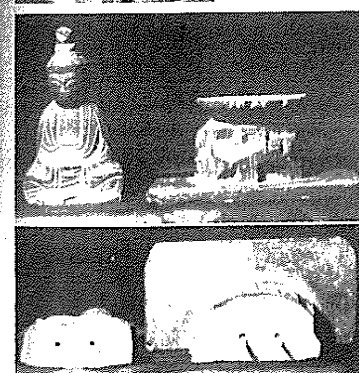


図35 71.0cm

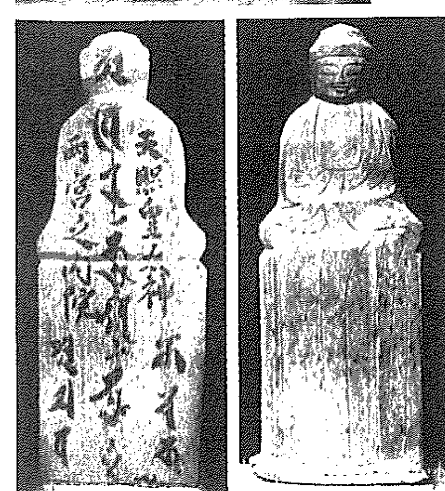


図38 47.5cm

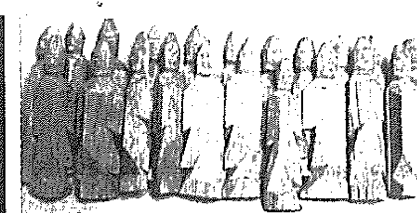


図27 3.5 ~ 20.5cm



図32 133.0cm

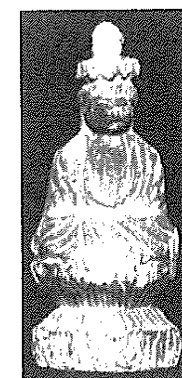


図34 7.8cm



図33 6.8cm

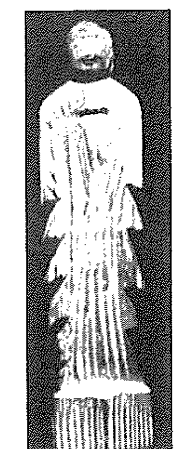


図37 20.0cm



図36 9.5cm

愛知県の円空像数

平成24年6月現在

	現存数	移出数	移入像	確認数
名古屋市	1857	57	8	1906
犬山市	11		8	3
小牧市	8			8
春日井市	4	3		7
一宮市	18	5	2	21
江南市	26	2	2	26
扶桑町	15			15
岩倉市	1			1
北名古屋市	35	6	4	37
豊山町	2	1		3
清須市	4			4
稲沢市	44		5	39
津島市	1017	1	4	1014
あま市	30	1	1	30
大治町	4			4
蟹江町	1			1
愛西市	13	3		16
東海市	5		2	3
大府市	3		1	2
知多市	4			4

阿久比町	1			1
半田市	1			1
南知多町	3		1	2
尾張旭市	6		1	5
瀬戸市	16			16
長久手市	3			3
日進市	3		2	1
碧南市	5		4	1
刈谷市	1			1
みよし市	1			1
豊田市	31		29	2
安城市	1		1	0
西尾市	3	1	1	3
岡崎市	6	1		7
豊川市	1			1
新城市	1			1
豊橋市	1			1
田原市	3		2	1
東栄町	1			1
幸田町	2			2
合 計	3192	80	77	3195

※ 「移出像」は、以前存在していたことが確認される像。移出先不明の像も含む。

※ 「確認数」は、「現存数」+「移出像」-「移入像」

※ 同一地域内の移坐は反映していない。



図64 31.8cm

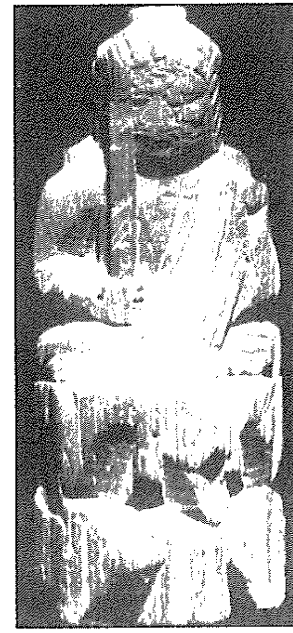


図63 29.0cm

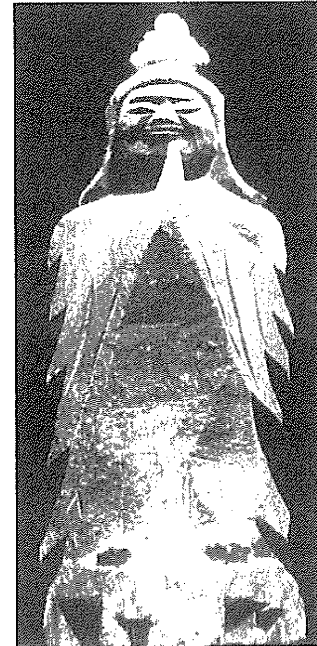


図62 31.0cm

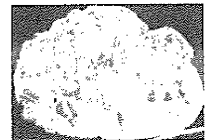
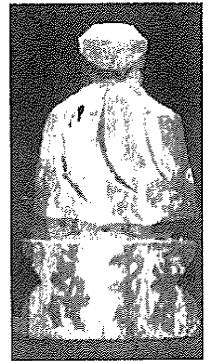


図61 4.8cm

西尾市・太山寺の韋駄天像(図64)は、旧幡豆町で唯一の円空仏である。

(註)

1 群馬県富岡市一之宮・貫前神社旧蔵(現千葉県山武郡芝山町・芝山にはわ博物館蔵)『大般若経』断簡の「壬申年生美濃國圓空(花押)」による。

2 岐阜県郡上市美並町・神明神社の天照皇太神 阿賀田大権現造像の棟札(表)寛文三年癸卯 霜月六日辰 奉重造 天照皇太神宮 阿賀田大権現 御尊林(裏) 圓空修造之別當 寶樹庵 神主 西小藤彦大夫「および同所の八幡大菩薩造像の棟札(表) 奉造立八幡大菩薩御宝殿氏子繁昌殿(裏) 寛文三年癸卯 十一月六日 御本尊初奉入也別當 寶樹庵 神主 西小藤彦大夫代人行之」による。

3 円空再興の岐阜県岡崎市池尻・弥勒寺の墓碑銘「當寺中興 丑(ユ・弥勒菩薩種子)圓空上人(花押) 元禄八乙亥 天七月十五日」による。

4 鈍業師の創立者である張振甫家の系譜。名古屋市蓬左文庫蔵。

5 樋口好古著、文政五年(一八二二)完成。

6 荒子観音寺の由緒、歴史から什器まで記された四巻からなる書。安政六年(一八五九)頃成立。著者は当寺十八世住職金精法印と考えられる。

7 谷口順三『讀円空伝』私家本、一九六七年

8 小島梯次「円空仏の背面梵字墨書による造像年推定試論」『円空研究』別巻2、一九七九年

9 天保十二年(一八四二)成立。岡田啓、野口道直撰、小田切春江絵。

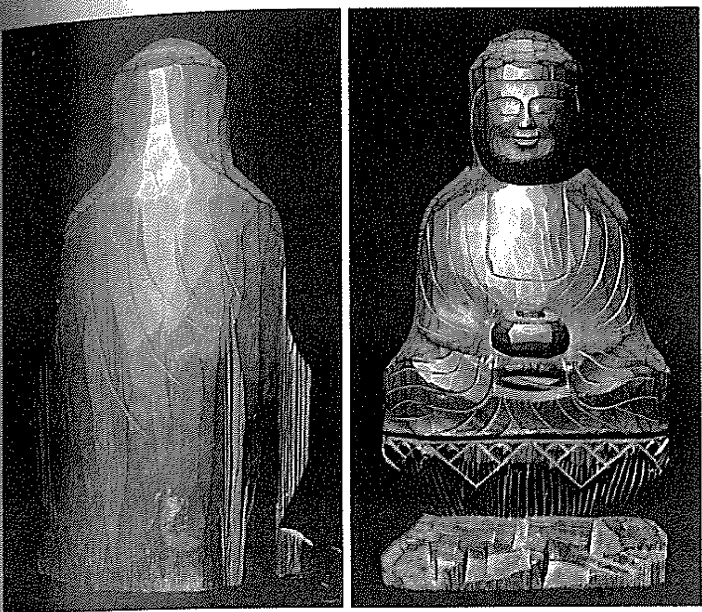
10 貞享元年は、弥勒寺蔵『説経口伝明鏡集』書写記「貞享二年甲子極月廿五日尾州蓬萊宮圓空書之」による。ただし貞享二年は乙丑であり干支によって貞享元年とした。

11 元禄四年は、岐阜県岡崎市洞戸・高賀神社蔵詩歌中の一記「熱田大神宮金剛毛玉春遊に元禄四年辛未正月吉祥日」による。

289 薬師如来坐像 一軀 長久手市指定文化財

永見寺（長久手市）
像高三六・〇

口もとに微笑みを浮かべた温顔で、法界定印の上に薬壺を持ち、蓮座、岩座の二重台座に坐す。どういうわけか岩座の下部が切断されている。そしてまたどういうわけか本像は大黒様として祀られていた。



長久手市には、本像の他に前熊寺に韋駄天像が安置されている。同市は作品250の円空像五体が祀られる尾張旭市・庄中観音堂からおおよそ5kmの距離であり、また碧南市・個人宅に祀られている不動三尊は、かつて日進市岩崎地区の山中に安置されていた像で、岩崎は長久手市から約5kmの距離である。庄中観音堂は、作品28の延宝四年銘を持つ馬頭観音の祀られている名古屋守山区・龍泉寺から5km程の距離である。

291 慈恵大師坐像 一軀

豊田市民芸館（豊田市）
像高二一・七

豊田市民芸館には、実業家であり、陶芸研究家でもあった故本多静雄氏から寄贈された二十五体の円空像が所蔵されている。

本像は、天台宗の春日井市・密蔵院旧蔵である。剃髪の僧形で、長い眉は額との段差であらわし、先端が鼻に連なっている。眼の刻線は深く強く、意志の強さを示すような半三角錐の大きな鼻であり、厚い両唇には微笑みを浮かべる。両手で数珠を持ち、岩座に坐す。

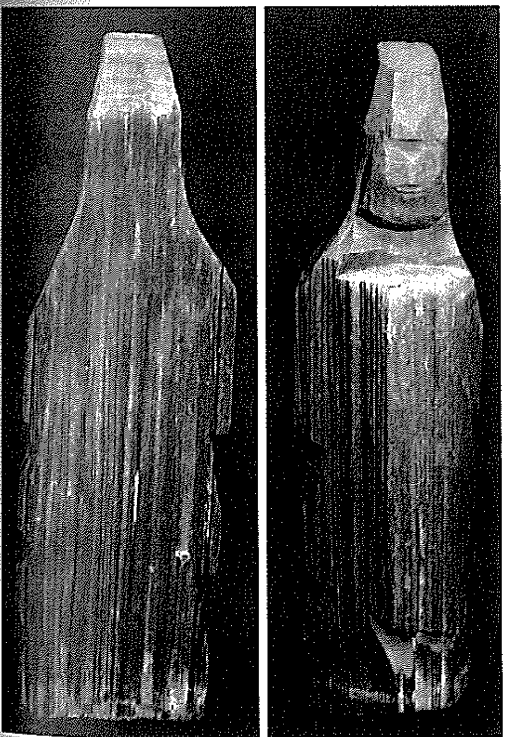


同様の形態をした名古屋市中川区・荒子観音寺に安置されている像の背面に、円空の文字で「慈恵大師」と書かれており、本像を慈恵大師とするゆえんである。慈恵大師は、天台宗十八世座主良源のことで比叡山延暦寺の中興の祖とされる。正月三日に示寂したことから元三大師とも呼ばれる。また、疫病退散のために鬼の姿になった角大師の異称で、民間信仰の対象にもなっている。円空の彫った像は温顔で、崇敬する祖師像として彫ったのであろう。彫りはかなり強く、様式的には延宝四年（一六七六）頃に位置付けられる。

290 観音菩薩立像（伝薬師如来） 一軀

霊鷲院（日進市）
像高二四・九

垂髪あるいは被衣の頭部で、眉、眼は刻線、口を彫り込み微笑みを含んだ表情の本像は、円空が各地に遺す観音菩薩の形態であるが、当寺では薬師如来として祀られている。



霊鷲院は、円空没後の享保十五年（一七三〇）の創建であり、本像は当地での造像ではない。当寺について『尾張志』に「舊くは大森村なる薬師堂をここに移したる」という記述がある。「大森村」は、現在の名古屋守山区大森で、円空はこの「薬師堂」で本像を刻したことが推定される。したがって本像が薬師如来とされているのかもしれない。

292 阿弥陀如来立像 一軀

観音堂（豊田市）
像高三一・四

肉髻で、耳が長く肩に届き、眉は額との段差であらわし、先端が鼻に連なる、眼は刻線、唇両端が彫り込まれ、微笑みを見せている。上品中生の印を結び、両袖の襷が波打つように重なっている。

円空像の蓮座の下は通常岩座か縦の筋彫台座であるが、本像は後人によって切り取られ、受座・反花・二重框座の台座に取り替えられている。素材で簡素な円空像の台座が、荘厳された台座に変えられている例は各地に見られ三十数例を数える。



上品中生の阿弥陀如来は、円空の阿弥陀如来八十余体中、三重・明福寺に安置される両面仏一六五・〇cm（薬師如来と阿弥陀如来）の阿弥陀如来の二体が確認されるだけであり、単独像は本像のみで貴重である。由緒、来歴は不詳で、背銘もなく、造像時期は様式上の観点からであるが、整った像容、彫りの強さから、延宝四、五年頃を推定させる。